

演 題 **全顎的治療後の咬合調整の有用性について**

演者名 三村 彰 吾

日 付 2015年3月24日

Keywords

1. 全顎治療
2. 顎位の変化
3. 咬合調整

抄録

私たち歯科医師は、咬合崩壊をきたした症例に対して、全顎的咬合再構成を行う場合がある。その際、咬合崩壊に伴い下顎位の偏位を疑って、適切な下顎位を求め、それを基準として咬合再構成することが一般的な治療の流れである。

しかし、治療後数年が経過した後、顎位の変化に伴い、早期接触や、咬合接触点の消失、顎関節症などの症状がでることをしばしば経験する。このような場合、咬合調整を行い、その後必要があれば補綴治療に移行するという場合がある。

今回、症例を供覧し私の私見を述べさせていただき、皆様のご意見を伺いたい。

症例

患者は54歳の女性、初診日は2003年2月18日、右下45の咬合痛が主訴で来院。基本治療後、歯周外科、インプラント埋入、矯正治療を行い。プロビジョナルレストレーションの時期において、2006年6月17日に最終補綴物を装着した。その後、経過は良好であったが、2010年4月6日、右側犬歯に早期接触を認めた。自覚症状、顎関節症状、筋触診に異常はなく。2010年6月25日に咬合調整を行った。予後は良好である。